

## 糸を紡ぐグレートヒエン



“Gretchen”

(1877)

ポール・マンスフィールドはパリ在住の若い画学生だった。才能に結構めぐまれていたし、美しいものは——どんな形で目の前に提示されようと——感激して見とれる性質たちだったので、たった一つの障害さえなければ、本腰を入れて取り組むことで名声を博していたかもしれない。その障害とは不幸にも金持ちに生まれついていたことだ。生活費を稼ぐ必要がなかったのである。そのことが自分でもよく分かっていたからだろうか、他に抜きん出るためには絶対に欠かせない芸術上の務め——それを習得したい気持ちに駆り立てられるには、情熱的な天才であるか、同様に強い原動力となるはずの無一文であるか、そのどちらかであることが必要な退屈きわまりない務め——を避けていた。

彼が画家になりたかったのは確かである。時間をつぶすのに、これ以上によい、理にかなった方法はなかったのだから。ポールの父親は肖像画家として大成功していたので、彼には幼少時から自宅のアトリエの雰囲気体が体に染みついていた。それにまた、本当のことを言えば、ポールという彼のクリスチャン・ネームの由来も、両親が使徒パウロ<sup>(1)</sup>に抱いていた尋常ならざる敬意からではなく、その名前が偉大な画家ルーベンス<sup>(2)</sup>のものであったという事実にある。彼はピーター<sup>(3)</sup>と呼ばれる可能性もあったのだが、それが実際あまり耳に心地よい音ではないという理由で、結局はポールという名前に落ち着いたようだ。

この青年は少し厚かましい性格の男であった。とはいえ、不愉快を覚えるほどではなかった。自分自身でも生まれながらに運命フォルトゥナの女神<sup>(4)</sup>の微笑を受ける人間だと思っていたことは間違

いない。運命の女神もまた、ポールがあまりに多くの若い娘から似たような賞賛のしるし、すなわち微笑を得意げに受けていたので、この若者に対しては不思議なことに嫉妬を感じないようだった。彼はこの上なく愉快に、時には優雅なアトリエで面白おかしく、時にはたくさんの友人や知人を訪問したりして日々を過ごしていた。要するに、とても愉快的な華の都・パリでの生活を満喫していたのである。

ある日のこと、ポールは朝の陽光を浴びながら友人と一緒にぶらぶら歩いていたとき、有名な画商の店に立ち寄り、つい最近この店が仕入れていた数点の絵画の品定めをした。友人と腕を組んで室内を歩きながら、さも嬉しそうに新しい絵画をひとつひとつ見て、厳しい批評を加えたわけである。批評とは実に楽しい、とても簡単な、まったくもって彼の性分に合った仕事であった。自分のことを生まれながらに偉大な美術批評家だと思っていたほどである。

そうこうするうちに彼らは『糸を紡ぐグレートヒェン』<sup>(5)</sup> という題の小さな絵の前にやって来た。そして二人とも立ったまま黙って絵をじっと見つめていた。友人の方は批評の言葉が聞けるだろうと期待してポールの顔を見たが、そうした言葉はまったく聞けなかった。この若き芸術家の目には驚きと賞賛の表情しか現れていなかったからである。この絵の前では、実際、いかなる批評も無力だった。一粒の涙の重みで垂れているように見える優美な黒いまつげの下からは、二つの瞳が報いられない恋心を詩のように雄弁に語りかけていた。女性の美の中でもっとも美しいもの、女性の愛の中でもっとも優しいもの、純真無垢な者だけが持つ神聖さ、そ

して謙虚な者特有の悲哀が、この絵に描かれた完璧な顔から放たれている。かすかに開いた唇から漏れる息づかいが音楽の調べのように聞こえるほどである。ポールが驚嘆の状態から正常に戻っても、彼の精神は高揚したままであった。

「そうだ！」と、ポールは友人に向かって大声で言った。「これを描いた男は天才だ！ モデルとなった女性は——肖像画に違いはないと思うけど——天使だ、天使だよ！ おい、君、何か言ってくれ。店にある他のどれよりも、この絵を自分のものにしたいぜ、ホントに。まったく、なんとという眼だ！ なんとという唇だ！ チェッ！ 詩なんか、絵画に比べたら何の意味もありません。グレートヒエンの詩から独自のイメージを形成できるのは、ほんの一握りの限られた人間だけだ。だが、ここでは——この絵の中ではグレートヒエンの姿が万人の目に見えるように描かれてるじゃないか。一番ひどい馬鹿でも、この絵を見たら、ため息をつくだろうよ。おい！ ちょっと、これを描いた画家は誰かね？」

この幾分ぶしつけな質問はフランス語で画商に対してなされたのだが、たまたま画商はそう遠くない所に立っていたので、両手をすり合わせながら近づいてきた。

「それは、ムッシュー、えーっと、そうそう、ロシニヨール<sup>⑥</sup>という名の若い男が描いたものです」

「ロシニヨールだって！」と、ポールは笑いながら叫び、友人の方を向いた。「なんて詩的な名前なんだ！」

「それは、ムッシュュー」と画商は英語で言った。「いわゆる戦時名<sup>(7)</sup>——<sup>ネ・ス・パ</sup>でしよう？ フラン  
ス語でいうところのヘノン・ド・ゲール<sup>レ</sup>だと思えます」

「そのとおり」とポールは答えた。「その画家とは知り合いになりたいな。で、絵の値段はいくらかね？」

かなり高い数字が出されたので、しばらくポールはじつと考えていた。

「チクシヨ、けっこう高いな。でも——」もう一度チラリと絵を見ながら——「手に入れないわけにはいかない。ほら、受け取りな。すまないが、絵はこっちの住所へ送ってくれ」

そうしてポールは絵の代金と一緒に名刺を手渡し、しばらく恍惚状態で絵を見つめたのち、安堵のため息をついて、その場を離れた。

二人は直ちに店を出た。「あの絵を見たあとでは、他のもんなんか、見られたもんじゃない。  
スラウツァサン・ディール  
言うまでもない——がね」

男が第二のピグマリオン<sup>(8)</sup>のようになり、絵に恋をすることが可能だとしたら、たしかにポール・マンズフィールドは『糸を紡ぐグレートヒエン』に恋していたと言える。絵を受け取ってスタジオの壁の一番よい場所に据えてからというもの、数日間、彼はその前に立って見つめるだけ——額縁の中の美しい姿形が動いて見えるほど、うっとりして見つめるだけ——であった。それから彼は絵の模写を始めた。この絵に対する模写ほど、彼が粘り強くやったことは今まで一度もなかった。今回の模写に二度トライしてみたが、二回目は努力の結果にげんざりさ

せられ、画布を捨ててしまった。しかし、また新たに描き始め、三回目の結果は少しはまし、なように思えた。それにしても、あの眼ときたら——あのえも言われぬ魅力に近づこうとするのは無謀な試みだ。本物の眼を創造するのと同じように、グレートヒエンの眼を模写で再現してみせるのは不可能である。それでも、彼は技量の限りを尽くし、その眼が持つ美の神髄を捉えようとした。さほど完璧を期さない人にとっては、こうした彼の試みは十分に成功していると思えたことだろう。

ポールの友人たちは無我夢中になった彼の様子に驚き、同時に面白がってもいた。しかしながら、この絵を描いた画家のことを知っている友人は一人もいなかった。ポールが付き合っていたのは、彼らのような社会的地位の高いアマチュア画家や上流階級の美術愛好家（ディレクター）だけなのである。従って、この絵は世に認められようと苦闘しているような、未だ無名の天才画家による作品ではあるまいか。その可能性は極めて高いと言わざるを得なかった。

毎朝、友人たちが集まると、「それで、君のグレートヒエンだけど、元氣かい？」という質問をポールは決まって投げかけられた。すると、彼はみんなに笑われながらも首を横に振り、「あの絵のモデルが誰か分かるなら、お金を少しぐらい出したっていいぞ！」と言った。

「馬鹿なことを言うな、君！」と誰かが叫んだ。「あれは人間の女性なんかじゃないぞ。あれは想像の産物で、ユーノー<sup>⑨</sup>のように非現実的なものを素材にして描いたに決まってる」

「ユーノーだと！ ふん！」とポールは言い返した。「あれはグレートヒエンだぞ、ホント

に。君が言うような、牛のような眼をした、神なんかじゃなく、生身の人間なんだ。いつか必ず彼女を発見してみせるさ、このパリで。何か賭けるかね？」

「ぼくが模写した『ウエヌス・アナデュオメネ』<sup>(10)</sup>は知ってるよね」と、友人の一人が大きな声で言った。「ちよほど描き終えたところで、宝物のように大切な絵なんだ。二ヶ月しても彼女とやらが見つからないことに、ぼくはそれを賭けるから、君は『グレートヒエン』の絵を賭けるよ」

「いやいや」と、ポールは首を振りながら答えた。「あの絵を模写したやつならいいけど、オリジナルの絵は駄目だね」

「よしきた！」と相手の男は大声で叫んだ。こうして賭けが成立したので、その場にいた者はみんな大喜びした。

このあとポールは真剣に本物のグレートヒエンを見つけ出そうとした。というのも、自分が購入した絵はモデルのいる肖像画に違いないと確信していたからである。そう思えるほど絵の中には個性の跡がはつきりと表われていたのだ。

彼はモデルを使う学校を訪れ、うわさで聞いていたプロのモデルを一人残らず、なんとか見ることができた。だが、どこのどのモデルもグレートヒエンとは少しも似ていなかった。とはいえ、このことは彼にとって大した驚きでもなかった。なぜなら、結局のところ、彼が探し求めた顔は、普通の女性のものとは思えぬほど、輪郭も表情も洗練されたものだったからだ。

それでは、よそで探すことにしよう。友人たちの野次や嘲笑にもかかわらず、彼はオペラ劇場だけでなく、すべての劇場、カフェ、公園、そして遊歩道でも搜索を続けたが、悲しいかな、グレートヒエンの顔はなおも想像の産物、神を理想化したもので、その原型となるものは存在しないように思えた。

それから二ヶ月が経過した。やはり友人たちの言うとおりで。この世には自分が探し求めているような麗人などいやしない。ポールはそのように納得しかけていたが、ある日のこと、たまたまパリの郊外を散歩していたとき、若い娘が目の前で店の窓に置かれた何点かの絵を見て、いるのに気づいた。彼の方に背中を向けていたが、彼の注意は即座に娘の見事な体形、優美な姿勢、とりわけ両肩にふさふさと垂れた髪に引きつけられた。それはまさしくグレートヒエンの髪——自然に任せてままとまったのか、不自然に見せない技で整えられたのかは分からぬが、小さく波打って光と影を織りなしている——まさにグレートヒエンと同じ光沢のある長い褐色の髪だった。

ポールは思わず立ち止った。そのようなことをしない男であれば、とても芸術家などになれていなかっただろう。彼はまるで自分も絵を見るつもりであるかのように窓に近づいた。彼女が今にも立ち去ろうとした瞬間、彼は思い切つて横を向き、その顔を見てみた。自分が何をしているかも分からず、彼は「グレートヒエン！」という明瞭な言葉を口から漏らしてしまつた。すると女性は驚いた表情でポールに目を向けた。彼は、それがとても多くの時間を使つて

画布の上に再現しようとしてきた例の美しい眼の表情と同じだと分かり、顔から火が出るような気持ちだった。まるで数分間も彼女に見つめられていたかのように思えたが、やっと彼は相手の驚いた原因に気づいた。

「すみませんが——」と、彼は礼儀を正そうと帽子を上げてフランス語で挨拶したが、それは非常にぎこちないものだったに違いない。「ぼくは——ひとりごとを言う癖があるんです。あの——あなたに話しかけると——その——思われるようなことを何か言いましたよね、ぼくは」

若い女性は顔を赤らめ、それからほほえんだ——間違いなく、それは我らが共通の友が自ら招いた滑稽な状況に対しての微笑であった。彼女はほんの少しお辞儀をしてから向きを変え、足早に立ち去った。

ポールは夢から急にさめたような顔で立っていた。先ほど会ったのはグレートヒエンだったのだろうか？

グレートヒエンは実際に微笑んでくれたのだが、それは自分の存在に対してであろうか、それとも自分の動作についてであろうか？

突然、彼が迷いからさめて顔を上げると、美しい姿形の彼女は街角を曲がるどころだった。彼は威厳などに気を留めることもなく思わず走り出した。街角まで来ると立ち止まったが、それは彼女がほんの数ヤード<sup>(1)</sup>前方にいたからである。常に一定の距離を保ちながら、慎重に彼

女のあとを付けていると、とうとう普通の下宿屋のように見える家のドアの前で彼女は立ち止まった。そのあとすぐドアが開き、彼女は家の中に入った。

ポールが最初感じたのは搜索に成功したことに對する喜びであつた。これがグレートヒェンであることに疑いの余地はない。グレートヒェンでないとしても、あの絵の肖像に驚くほど似ているのだから、友人たちも絵のモデルになり得たかもしれない女性——いるはずはないと彼らが断言していた女性——が見つかったことを認めないわけにはいかないだろう。

ポールは何気ない顔を装いながら家の前を通り、その家の番地に目を配つて、通りの名前を確認した。そして、家の真向かいに小さなレストランがあるのに気づいたので、通りを横切り、このレストランに入つて、グラス一杯のアブサン<sup>(12)</sup>を注文した。それから、彼は給仕の機嫌をとるために酒<sup>アルコール</sup>を手渡し、無頓着な口調で「向かいの家は下宿屋かね？」と尋ねた。

「はい、そうです」

「あそこの住人たちだが、誰か知ってるかい？」

「えーっと、そうですね——婦人帽の仕立てをしてるマドモアゼル・ネズがいらっしゃいますか——」

「若い女性かね？」と、ポールは少し狼狽しながら相手の言葉をさえぎって尋ねた。

「違います、ムッシュー」給仕は両手を挙げて叫んだ。

「マドモアゼルの年齢は知りませんが、お若いとは言えませんよ」

ポールは相好そうごうを崩し、若い給仕に先を続けさせた。

「それから、作家のムツシュー・デユノワ、ムツシュー・アリコと奥様——この方は画家です  
すが——」

「奥様だつて！」ポールは体中に悪寒が走るのを感じた。「画家なんだね！ その人は結婚して、奥さんと一緒に暮らしているのか！」

「たしかです、ムツシュー」と、給仕は大きな声で答えたが、ポールの突然の興奮にすつかり驚いた様子だった。

ポールはそれ以上は何も言わなかった。帽子をつかむと、椅子から急に立ち上がり、大慌てでレストランを飛び出し、できるだけ早足に通りから出たかと思うと、そのまま最短の道を選んで帰宅した。

家に着くとすぐにポールはスタジオへ走って行き、グレートヒエンの絵の前に腰かけた。それから、慣れ親しんだ肖像画を見ると、突然、胸がわくわくした先ほどの出来事がリアルに思い起こされ、一体全体なぜ自分はあるような異常行動をとったのだろうかと自問し始めた。では、彼女は結婚していたのか？ 旦那の名前は——何だったっけ？ もう名前は忘れちゃったが、画家であることは分かっている。だが、そんなことが俺にとって、ポール・マンズフィールドにとって何だと言うんだ？ 俺は賭けに勝ったんだし、疑い深い友人どもを今度は自分が笑ってやれるんだから、喜んでしかるべきじゃないか？

しかしながら、なぜか彼はあまり喜べるような気分ではなかった。むしろ、グレートヒェンの絵の前にひざまずき、おいおいと泣きたい気分だった。いきなり宝物を奪われてしまったような、今まで長い間あがめてきた偶像が、突然、誰かもっと幸運な奴に奪い取られたような、そんな気持ちになったのである。でも、自分はある美しい絵を、前と同じように、ちゃんと持っているではないか。いや、前と同じではなくなった。彼は肖像画のモデルを、生きて息をし、そして——ああ、神よ！——ほほえんでさえいる本物のグレートヒェンを見たのである。目の前にある、この死んだ肖像画は生命のすべて、美しさの半分を失ってしまった。

肖像画とそのモデルに対する関心は純粹に芸術的なものだった。ポールがそう思っている自分を納得させようとしたのは、それはそれで結構なことであった。彼は、思わず「グレートヒェン」と叫んだこと、そして彼女が自分を見た瞬間に示した態度を思い出し、苦笑せざるを得なかった。彼女の本名がグレートヒェンだという可能性はあるだろうか？ 多分あるだろう。あまりフランス女性のように見えなかったし、彼女がはっとした時の様子は、突如として見知らぬ男に自分の名前を呼ばれたという事実によってしか説明できないのだから。

これまで絵のモデルを発見すべく苦勞に苦勞を重ねてきたにもかかわらず、突然、ポールは今回の成果を友人たちに告げ、賭けられていた『ウエヌス・アナデュオメネ』をもらうことに嫌悪感を覚えた。どちらかと言えば、今度の出来事は自分の胸に秘めておき、それについては何も言いたくない気がしたのである。まあ、正直、自分でも認めたくはないが、そんなことを

すれば、勝ちではなく負けを宣言したような気になるかもしれない。いやいや、やつぱりグレートヒエンについては何も言うまい。賭けの締切である月末もすぐにやって来るから、少し前に仕上げた肖像画の模写は手放し——それから、オリジナルのモデルについては完全に忘れることにしよう」とポールは思った。

それから二週間が経過した。我々はポール・マンズフィールドが例の小さなレストランの反対側にある下宿屋のドアに近づく姿を見ることになる。これは一体どういうわけであろうか？ あれやこれやの理由で、彼は『糸を紡ぐグレートヒエン』のモデルのことは忘れようという決心を変えてしまったようである。

彼のノックに応じて召使の娘が現れた。

「ここに芸術家が住んでおられるよね？ 名前は失念したんだけど——」

「ええ、旦那様、それは画家のムッシュ・グレンツェルです。二階のアトリエにいらっしやいます」

「グレンツェル——グレンツェルか」と、ポールはひとり言のようにつぶやいた。「ドイツ人の名前だな。給仕の奴が教えてくれた名前じゃないけど……」

「ここに住んでる画家はその人だけかね？」

「そうです、旦那様」

「うむ——同一人物に違いない。お会いしたいんだけど、取り次いでくれるかい？」と言っ

て、彼は名刺を手渡した。

数分後、ポールは二階の非常に小さなスタジオに案内されたが、その部屋の家具は絶対必要な最低限のものしかなかった。その代わり、四方の壁には幾つかの見事な絵がかけられており、ポールにはその筆づかいが『グレートヒエン』を描いた画家のものと同じだと分かった。そのとおり——それに例のモデルと全く同じ顔の肖像画もある——これで疑いのうの字もなくなった。その顔の目鼻立ちにも見覚えがあったので、ポールの心臓は激しく鼓動した。

画家が姿を現すまで、こうしたこと気づく時間があった。画家はとても若い男で、外見は紛れもなくドイツ人である。二人の会話はポールが自分もまた画家だと自己紹介したことで始まった。

「少し前のことですが、あなたの絵を一枚たまたま買ったのです。『糸を紡ぐグレートヒエン』という絵で、非常に満足のいくものでした。それで、こんなに才能のある画家がおられるのなら、ぜひ拝眉の栄に浴したいと思ひましてね、勝手に訪問させていただいた次第です」

「私の方こそ、お会いできて光栄です」と、グレンツェルはフランス語で答えたが、強いドイツ語なまりがあった。「どうして私の名前が分かりましたか？」と、彼はほほえみながら尋ねた。「ムツシュー・アリコから聞かれたんですね」

この若い画家が自分の名前について質問したとき、すぐにポールは「しまった！」と心の中思ったが、質問に続いた画家自身の答えに飛びつき、黙つてうなずいた。

「きつとロシニエールという私の雅号を面白く思われたんでしようね」と、相手の画家は率直な、愛想のよい態度で話を続けた。「そうした名前にした理由の善し悪しは分かりませんが、パリではフランス的な名前の方が売れるんです。ところで、私の『グレートヒエン』はお気に召しましたか？」

「それはもう。ぼくは——」

このとき部屋の扉が急に開いた。入って来たのはグレートヒエンその人であった。

ポールは起立して機械的にお辞儀をした。自分の顔がいやになるほど赤くなっているのは分かってはいたが、その赤面をどうすることもできなかった。グレートヒエンは彼を見て驚いた様子だったが、それは見知らぬ人がいるとは思っていなかったからにすぎない。彼女は他人行儀なお辞儀をし、ひとことふたことドイツ語でグレンツェルに何か言ってから、部屋を出て行った。

「ご覧のとおり、私は芸術家がみんな住んでる地区からとても離れた所にいます」と、この若い画家は再び椅子に座りながら、感じのよい声で話を続けた。「生まれつき辺鄙な場所が好きで、周りに知人たちがいて邪魔されても甘んじなければならぬのが特にいやなんです。ここに来た時も、下宿屋にムツシュー・アリコという別の画家が——あなたとも面識がありそうですが——いるなんて、何日も気づかなかったほどです。その人も静かな場所がお好きだったようで、私たちは互いに邪魔することもありませんでした。彼が下宿屋を出てからというも

の、これ以上は望めないほど、私は孤独を享受できてるんですよ」

ある考えが突如としてポールの頭をよぎった。二週間前に給仕が話してくれた名前は、まさにアリコではなかったか？ たしかにそうだ。でも、そんなことがあり得るだろうか？——

「いずれにせよ、おそばには奥様がいらつしやるわけですから」と、ポールは頭の中であれこれ考えるのを止め、あわてふためいて言った。

「私の妻ですって！ 結婚なんかしてませんよ！」

「してないですって！」 ポールはそう叫んで椅子から飛び上がり、次の瞬間には愚かな真似をしてしまったと思い、また腰を下ろしたが、顔は真っ赤になっていた。「すみません——」彼はほほえんで、くつろいだ様子を見せながら言った。「ぼくは——ぼくは釈明の余地もありませんが、今しがた入ってこられた女性は奥様だと思っていました」

グレンツェルは腹を抱えて笑った。「あれは妹ですよ。二人ともここで一緒に、とても愉快に暮らしてます。妹は芸術的な審美眼が優れておりまして、実際、私が描く絵についての批評で傾聴に値するのは、妹の意見をおいて他にありません」

ポールは計り知れないほど気持ちいが和らいだ。すべての謎が今や氷解した。二週間前はあわてていたので、給仕が下宿人リストの最後まで言わないうちに、最初に拳がった画家の名前を聞いてすぐ、それはグレートヒエンの夫だと思ひ込んでしまったのである。ポールが会話を続ける際の陽気さには目をみはるものがあった。グレンツェルは訪問客にとっても満足した様子

で、ポールの方もこのドイツ青年は実に面白い男だと思ったので、別れ際には二人とも近いうちにまた会いましょうと言いつち出すほどだった。

次にグレンツェルを訪問したとき、ポールは彼の妹に正式に紹介され、幸せなことに丸々一時間とても楽しくグレートヒエンの会話を耳を傾けることができた。彼女の兄は決まってポールの勘違いの話を持ち出したが、美しい女性が顔を真っ赤にさせている姿を見るためであれば、ポールは今の十倍でも馬鹿な真似を喜んでいたのである。興味深いことに、彼女の本当の名前はマルガレーテ<sup>(13)</sup>だと分かった。こうした事実があったために、兄は妹をモデルとする絵を最初に思いつき、妹の熱烈な詩趣に富んだ表情——い、の一番にポールの注意を引くことになった表情——を描写しながら、素晴らしい肖像画を制作したわけである。

そうこうするうちにポールとグレートヒエンは本当に親密な間柄となった。そうした仲になった結末は、私が思うに、この若き芸術家が初めに『糸を紡ぐグレートヒエン』を見た日から半年後に起こった、ちょっとした出来事を再現してみせることで、一番よく分かっていただけだろう。それはポールのスタジオに数多くの友人が集まった時のことであるが、不思議なことにも偶然、しばらく前にポールが負けてしまった賭けのことが話題になった。

「あれは素晴らしい冗談だったなあ」と、『ウェヌス・アナデュオメネ』を賭けた例の青年画家が、その話を大きな声で新人にしていた。「マンスフィールドの奴は、実際、あの絵にぞっこんほれちまってるね、モデルとなった女性が絶対に見つかると言って賭けたんだぜ。もちろん

奴の負けだった。分別に従ってすっかり忘れてくれたからいいものの、たとえ今日この日まで探し続けていたって負けてただろうね、きつと」

「それはどうか、分からんぞ」とポールが大声で言った。「ぼくは結局うまくいかなかったわけじゃない。実はグレートヒエンを見つけてたと君に言ったとしたら、どうするかね？」

「おいおい、そんなこと信じるもんか」

「そうだろうな。でも、真実なんだぞ」

「グレートヒエンを見つけたってことがかい？」と、何人かが大きな声で尋ねた。

「ウイ・メツシユそうだよ。彼女を見つけたのさ。ひと月したら、ぼくはイングランドへ戻ることになって

る。だから、出発する前の晩に、ここでちょっとした夕食会をするから、君たちの中で出席したい奴がいるなら、誰でも招待してあげよう。そのとき、ぼくはグレートヒエンを見つけたことを証明するって約束するよ」

その時はこれ以上のことをポールから聞き出すことはできなかったが、友人たちは彼の招待を決して忘れていなかった。私自身、そのちよつとした夕食会にたまたま出席していたので、その場でポールは約束どおり、私をグレートヒエンに紹介してくれた。ただし、そのとき彼が紹介してくれた女性はマンスフィールド夫人であった。

【訳注】

(1) パリサイ派に属する熱心なユダヤ教徒としてキリスト教徒迫害に赴く途中、復活したキリストの声を聞き、回心して使徒となる。反感を持つユダヤ人にエルサレムで捕えられて入獄、のちにローマに護送され、ネロ帝の迫害で殉教した。

(2) ドイツ生まれのフランドルの画家 (Peter Paul Rubens, 1577-1640)。師匠たちのマニエリズムを早く脱し、ルネッサンスの諸大家、とりわけティツィアーノなどのベネチア派の作品に学びつつ、豪華絢爛、官能美にあふれた作風で、広く宗教・歴史・肖像・風景などを描いた。代表作に『麦わら帽子の女』や『聖母被昇天』がある。

(3) キリストの十二使徒の一人。もとガリラヤの漁夫であったが、イエスの信頼を受けてペテロ (巖の意) の名を与えられた。キリスト受難に際して逃亡するが、のちに回心して伝道を始め、パウロ同様にネロ帝の迫害で殉教した。

(4) ローマ神話に登場するフォルトゥナ (Fortuna) ——ギリシャ神話のテュケー (Tyche) ——は運命の女神で、豊穡の角 (Cornu Copiae) や移ろいやすい帆を手にして、運命の舵や車輪を司り、運命を紡ぐ道具として糸車を操り、気まぐれで不安定な球体に乗った図像で描かれる。英語でフォルトゥナのお気に入り (Fortune's favorite) とは「幸運児」のこと。

(5) 『糸を紡ぐグレートヒェン』 (Franz Peter Schubert, Gretchen am Spinnrade, 1814) はシューベル

トの声楽とピアノのための歌曲。一八一四年一〇月一九日に作曲。ゲーテの戯曲『ファウスト』(Faust, 1808, 1833)の第一部から抜粋された詩に基づく。伴奏のピアノが糸車を描写し、愛人を失った孤独な少女グレートヒェンは、糸を紡ぎながら自分の苦悩やファウストに寄せる想いを歌う。この愛・情熱の悲痛な叫びは、ファウストの受身的な恋人グレートヒェンと自分を同一視するシューベルト自身の告白と解釈することができる。

- (6) ロシニョール (Rossignol) はフランス語で「ナイチンゲール」の意。
- (7) 「ノン・ド・ゲール (nom de guerre)」はフランス語で「戦時名 (warname)」の意であるが、画家や作家の筆名・雅号の意もある。
- (8) 古代ギリシャの伝説に登場する彫刻が巧みなキプロスの王。象牙を材料に自分が理想とする乙女の像を作り、その彫像を恋するようになる。彼の真剣な祈りに応えて女神アフロディーテがその彫像に生命を与えたので、彼は乙女と結婚する。
- (9) ローマ神話に登場する女神で、ジュピターの妹にして妻。「牛のような眼をした (cow-eyed)」と形容される。ギリシャ神話のヘラ (Hera) と同一視され、とりわけ結婚と女性の保護者であった。
- (10) ベネチア派の画家ティツィアーノ (Tiziano Vecellio, 1488-1576) の『海より出づるウエヌス』(Venus Anadyomene, c. 1525)。この絵ではローマ神話の愛と美の女神ウエヌス(ギリシャ神話のアフロディーテ)が濡れた髪を絞る姿が描かれている。
- (11) 一ヤードは三インチで、九一・四四センチ。

(12) ニガヨモギを主とした葉草類を蒸留酒に浸出して作った緑色で強烈な芳香のリキュール。水で割ると白濁する。一七三〇年頃にスイスで発明され、十九世紀にフランスの芸術家たちによつて愛飲されて作品の題材となったが、高いアルコール度数と安価のために中毒者・犯罪者を出し、多くの国で製造禁止となった。

(13) グレートヒェン (Gretchen) やグレートテル (Gretel) はドイツ語名マルガレーテ (Margarete) の愛称である。グレートヒェンはゲーテの『ファウスト』においてファウストに愛をささげる女性。グレートテルはグリム童話「ヘンゼルとグレートテル」で両親に森に捨てられ、兄ヘンゼルと一緒に魔女退治する少女。グレートヒェンもグレートテルも神を信じて、最後はハンピーエンドになる。